2018年
6月26日
火曜日

市場の論理と相対（あいたい）の倫理

久保　真　教授（経済学史）

　以前、担当する「経済の歴史と思想」の授業でこんな話をしました。産業革命期のイギリスでは、政府が効率的に税金を徴収するシステムを構築し、低い金利で国債を買ってもらうことができたのに対して、フランスでは、革命政府が王政時代の債務の不履行を宣言したため、その後も高金利を負担しないとフランス政府は国債を買ってもらえず、軍事の天才と謳われたナポレオンの敗走の遠因となった、という話です。ここでのポイントは、信用格付けの高い国は低金利で資金調達できるが、格付けの低い国は高い金利を払ってはじめて資金調達できる、ということです。授業では、「皆さんもそうですよね。ちゃんと返してくれそうな相手なら安い金利でいいだろうけど、ひょっとしたら返せなさそうだという相手には、そのリスクを相殺する程度の高い金利を要求するでしょ」と言ったのです。が、授業後に回収したコメントペーパーの中には、こんなコメントがありました。「返せないこともあるくらい相手が困っているのなら、むしろ金利を安くしてあげるのではないか」というのです。はっとさせられました。というのも、私が、「市場の論理」とでもいいうるような行動原理を暗黙のうちに前提としていたことに気付かされたからです。

「市場の論理」というのはこういうことです。国債を販売している市場（例えば、ネット証券のサイト）を訪れたとしましょう。そこでは、財政状況のよい国と悪い国、二つの国の国債（同じ通貨建て）が売られていて、どちらかを選べます。もし金利が同じなら、当然あなたは財政状況がよい国の国債を選んで買うでしょう。別の言い方をすると、財政状況の悪い方の国は、もっと高い金利を提示しないと選んでもらえないということです。これが、先の「市場の論理」です。

　他方、コメントが想定する状況はどのようなものでしょうか。困窮している親友から金を貸してくれと言われたとしたら、「利子なんていいから、とりあえずこれでおいしいもの食べて、元気出せよ」と言ってお金を貸すかも知れません。逆に、「君は財政状況が極めて悪化しているから、債務不履行を行う可能性が高い。従って、そのリスクを相殺するくらいの高い金利を約束してくれないと、君にはお金を貸せないね」とは言わないでしょう。それは相手が親友だからです。これを「相対の倫理」と呼んでおきます。

　さて、我々が暮らしている社会は別名市場経済とも呼ばれるように、人々は多くの場面で「市場の論理」でもって行動します。経済学は、こうした行動を活写して、その結果効率的な結果が往々にしてもたらされることを主張します。他方で、「相対の倫理」は随所で重要な役割を演じていることも事実ですが、経済学にはあまり出てきません。とすれば、経済学は「相対の倫理」を不要だと主張しているのでしょうか。そうではないと私は考えます。「相対の倫理」に依拠して同様の結果を実現しようとしたら、あまりにも大きな期待を「相対の倫理」にかけてしまうことになるだろう、ということ、別言すれば、「相対の倫理」というものがとても稀少な資源だ、ということだと思うのです。こうした点を改めて考えさせてくれた上記の学生さんは、経済学を学ぶ上で大きな資質を持っていると、改めて感じ入った次第です。■